様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月　 ８ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２７５９

研究課題名（和文）談話における焦点化構文の総合的研究ー統語論と語用論の棲み分けに関する考察

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Focus Constructions in Discourse: Territory of Syntax and Pragmatics

研究代表者
加藤　雅啓（KATO, MASAHIRO）

上越教育大学・その他部局等・特命研究員

研究者番号：００１３６６２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　文法と談話という２つの領域は互いに独立した領域と考えられてきたが、人間の言語運用の場面では、文法による制約と談話からの要請との軋轢が文法体系の再構築を迫る圧力となる事例も少なくない。本研究は文法と談話の多様な関わり合いの具体的事例として焦点化構文を取り上げ、文法による統語的制約に対して、話し手・聞き手・場面という語用論的要因からの要請がどのように関わっているか文法と談話の接点の姿を明らかにしようとする試みである。
　具体的には焦点化構文に伴う総記的含意とその却下可能性を精査し、英語の丁寧表現における時制と相の選択について「心的距離」と「一時性」を拠り所にし，「気まずさ回避の方略」を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　文法と談話は相互に依存関係にあることを示すことにより、これまで談話とは無関係であると考えられていた他の統語構造についても、談話となんらかの接点を持つことが予想される。これにより自然言語の解明とコミュニケーションの成立場面である談話の緻密でありながら、柔軟な言語運用研究に対して、新しい研究領域を切り開くという意味で、本研究は今後の言語研究の進展に大いに貢献 することができると思われる。
　また、英語の丁寧表現における時制と相の選択について，「心的距離」と「一時性」 及び「気まずさ回避の方略」が密接に関与していることを明らかにし、英語のポライトネス研究に一定の学術的意義をもたらすものと思われる。

研究成果の概要（英文）：　Sentence grammar and discourse grammar are two different fields of study. Both of them have been considered to be mutually independent. When we look into each category from the viewpoint of grammatical function and pragmatic factors, we demonstrate that they closely interact with each other to choose one particular form to fit in discourse. We have investigated exhaustiveness implicature of focus constructions in discourse as well as how to select tense and aspect when we make our utterances sound polite in English.

研究分野：英語学

キーワード：語用論　関連性理論　機能文法　分裂文　心的距離　一時性　時制　事実生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

文法と談話という 2 つの領域は互いに独立した領域と考えられてきたが、人間の言語運用の場面では、文法による制約と談話からの要請との軋轢が文法体系の再構築を迫る圧力となる事例も少なくない。本研究は、文法と談話の多様な関わり合いの具体的事例として焦点化構文を取り上げ、文法による統語的制約に対して、話し手・聞き手・場面という語用論的要因からの要請がどのように関わっているか、いわば文法と談話の接点の姿を明らかにしようとする試みである。

研究代表者は、ここ数年来、談話における焦点化構文、とくに分裂文、右方移動構文の発話解釈に関わる推論過程の研究の必要性を感じていた。分裂文とは変項(variable)と値(value)との二項関 係(X=Y)を表す文であり、変項はいわば未知数に、値はこの変項を指定する答えに相当する。具体的には、it 分裂文、指定的用法の wh 分裂文、ハ分裂文、及びガ分裂文を挙げることができる。

これまで文法の問題として扱われてきた項目の中には、場面や文脈、及びこれに基づく論等の要因を考慮しない限り一般的な説明ができない現象が含まれている。とくに it 分裂文、wh 分裂文、ハ分裂文、ガ分裂文等の有標語順を生み出す焦点化構文は、話し手・聞き手の背景知識に基づく「会話の含意」や談話における推論過程が複雑に関与するため、その語用論的機能と解釈に関して語用論や認知文法の枠組みにおいても研究は緒に就いたばかりであり、依然として一致した見解が得られないのが現状である。また、場所句倒置構文(locative inversion)や重名詞句移動構 文(heavy NP shift)などの右方移動構文についても、話し手・聞き手・場面における情報構造が密接に関与しており、容認可能性に関わる要因はまだ十分に解明されたとは言い難い。

さらに、焦点化構文に典型的に見られる総記的含意(例 It was John who broke the window.では John だけが窓を壊したという含意)を巡っては、これを「言語規約的含意」とするか「会話の含意」とするか未だ体系的な解明がなされていない。

２．研究の目的

本研究は談話における日英語の焦点化構文(focus construction)に見られる統語的特性、認知的特性、及び語用論的特性を「コード化された意味」と「推論による意味」の観点から捉え直し、解釈の「却下可能性(cancelability)」を根拠に、統語論と語用論の棲み分けの妥当性を明らかにするものである。具体的には焦点化構文、とくに英語の it 分裂文、wh 分裂文、右方移動構文、及び日本語のハ分裂文、ガ分裂文のコード化された意味と推論による意味を考察し、焦点化構文に伴う総記的含意とその却下可能性を精査した後、談話における焦点化構文の解釈に関わる統語論的制約と語用論的推論過程を明らかにし、焦点化構文に関わる文法体系の再構築を目的とする。

３．研究の方法

本研究は、[1]文献による理論研究、[2]言語資料の収集と分析、[3]談話における焦点化構文のデータベース作成と公開、の三つの方法によって進められる。

[1]文献による理論研究

生成文法の観点からは、「移動に課される統語的制約」の観点から、英語分裂文の研究は文レベルにおける分析だけでは不十分であることを検討する。さらに中島(1995)の「主語からの外置については統語論と語用論の棲み分けが必要である」という分析に注目し、統

語論と語用論がどのように役割を分担しているか明らかにする。この際、文文法と談話文法のインターフェースとして関連性理論の理論的背景を Carston(2002)に基づいて検討する。

関連性理論の観点からは、英語分裂文が果たす談話機能について、聞き手の想定形成にどのような影響を及ぼすか「最適の関連性」原理との関わりを検討し、先行文脈との意味的つながり、 もたらされる認知効果、及び処理労力との関連性を探り、想定から導かれる論理形式と語用論的推論との関係を明らかにし、英語分裂文の解釈に関する推論メカニズムを検討する。

認知言語学の観点からは、メトニミーリンクによる語義の拡張、パートニミー・トポニミーと英語分裂文との関係を検討し、参照点構造(Langacker,1993)を明かにし、メトニミー的認知プロセス、及びメトニミー的推論の観点から、英語分裂文に関わる認知メカニズムを考察する。

機能文法の観点からは、英語分裂文がもたらす談話機能について詳細に検討していく。Rochemont (1978), Rochemont & Culicover (1990)らの「後置要素の焦点化」説、Hawkins (1994)の「統語的重量」説、及び談話における情報構造の観点から高見(1995)の「情報の重要度」説を取り上げて、これらの分析の妥当性を検証する。

これらの理論研究に基づく分析結果を総合的に検討し、英語分裂文が持つ統語的制約と談話機能の本質的な特性を明らかにし、談話における英語分裂文の認知プロセスと推論メカニズムの全容を総合的にとらえ、コード化された意味と推論による意味の関わりを明示的に解明する。

[2]言語資料の収集と分析

言語資料の収集は (1)英字新聞、英文雑誌、英米文学作品、*Los Angels Times*, *Washington Post*, *New York Times*, *Daily Yomiuri*)、英文雑誌(*National Geographic*, *New Yorker*, *Time*)、(2)電子コーパス Brown Corpus, Lund Corpus, LOB Corpus, British National Corpus, WordSmith Ver.6, Michigan Text Corpus, 及びインターネット上の言語資料集、英米文学作品に関するアーカイブを運営する Project Gutenberg (http://gutenberg.net/)から収集する。

[3]it 分裂文、wh 分裂文に関わるデータベース作成・公開

[2]によって収集した英語分裂文の用例はデータベースソフトを用いて分類・整理し、キーワー ド検索処理をした上でデータベースを作成し、上越教育大学 WWW サーバー(http://www.juen.ac.jp/)上で運用し、一般に公開し、内外の研究者の便宜を図る（作成中）。

４．研究成果

統語論と語用論の棲み分けの妥当性を明らかにするため、日本語分裂文について、認知言語学の観点からは、メトニミーリンクによる語義の拡張、パートニミー・トポニミーと 日本語分裂文の関係を詳細に検討し、メトニミー的認知プロセス、及びメトニミー的推論の観点から、日本語分裂文に関わる認知言語学における推論メカニズムを考察した。機能文法の観点からは、「有標構文は処理するのに労力かかかり、これに見合う効果を果たさねばならない」という分析と「文の適格性は統語論的制約と語用論的条件に基づいて決定される」という議論を検討し、日本語分裂文に関する統語論と語用論の棲み分けという観点の可能性を分析した。

具体的には、これまでに得られた研究成果を認知言語学、関連性理論、及び機能文法の

観点から総合的、かつ、統合的に検討し、英語分裂文、右方移動構文、日本語分裂文に関わる統語的制約、認知プロセスと推論メカニズムの妥当性を検証し、談話における焦点化構文に共通する一般化された推論メカニズムと認知語用論的原理の解明を試みた。

当初研究対象としていなかったが、新たな取り組みとして令和元年度は、これらの研究成果を援用し，英語の丁寧表現における時制と相の選択について，統語論的制約に加え、「心的距離」と「一時性」などの語用論的制約が密接に関わっていることを明らかにした。さらに、動詞の過去形や進行形、あるいは仮定法を用いることによって、なぜ丁寧な表現になるのかという未解決の課題について、「気まずさ回避の方略」を提案し、英語の丁寧表現に関わる興味深い問題を明らかにした。この成果は、英語のポライトネス研究に一定の学術的意義をもたらすものと思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 加藤雅啓	４．巻 3
２．論文標題 英語の丁寧表現における時制と相の選択ー心的距離と一時性ー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大妻女子大学英語教育研究所紀要	６．最初と最後の頁 123-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 高見健一、行田勇、大野英樹（編）	４．発行年 2017年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 517
３．書名 『不思議に満ちたことばの世界 』論文「時制の選択ー心的距離と事実性ー」（加藤雅啓）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考